

福井県の教育行政の取組みについて視察研修

福井大学・教職大学院 平成27年11月16～17日

福井大学・教職大学院の松木教授より福井県の教育行政について研修を受けた。教職大学院は、21世紀の学校教育を担う教員の専門的力量的開発を目的に開設され、「学校の課題を解決し、高い教師力を目指し、学校のリーダーを育てられる大学院」とのことである。

きめ細かな指導を可能とする仕組みもあるとのことである。これらが全国学力テストでの上位成績を保っている理由とのことである。しかし、21世紀のグローバル時代が求める学力は、知識詰め込み型の教育だけでは駄目で、能動的な教育として「知識を使って、どのような問題をも解決していく力」を身に付け「グローバル時代を生き抜く力」を付ける問題解決型グループ学習がアクティブラーニングといわれる教育であり、今後必要とのことである。



不登校の問題は、辛い事があると休んでもいいと学んでしまうと、何かあった時に、そこから不登校になってしまう。1年生の時に休み癖を付けないことが大事とのことである。教育現場の現状や、これからの教育内容についても理解することができ、今後の議会活動に活かしていきたい。

総務福祉文教常任委員会 委員長 仁科 英一

目的は、平成19年に発生した能登半島地震の教訓から防災拠点機能を持った公共施設とし、町内を回るコミュニティバススターミナルとしての機能も持たせた複合施設で、国道19号線沿いにある。

①道の駅織姫の里なかのとは中能登町は平成17年3月に鳥屋町、鹿島町、鹿西町が合併し誕生した町で、ほぼ半島の中央部に位置し隣は七尾市で、金沢や富山からも50kmと好位置にあり、人口は1万8千、世帯数6千、面積89km²で、規模は御代田町に近いと感じた。「織姫の里なか」とは施設面積1万8千m²・総事業費12億3千万円で平成26年4月にオープンしたが、整備には、あらゆる交付金や補助金を活用し、約6億円を総務省や国土交通省から受け、町が整備した。

②農事組合法人 音川加工 昭和60年遺贈を過ぎた五十嵐静子氏を中心に創業された音川加工は、平成13年に組合員11名、資本金20万円で法人化され現在に至っている。



音川加工作業風景

事業内容は大がぶを使った漬物をはじめ各種漬物類の製造販売・赤飯・餅・味噌加工と多岐に渡り、現在も商品開発は続いている。販売先は、地元はもちろん京都や鎌倉にも出荷し、販売額は2千2百万円に上っているとのことである。我が町で道の駅を考案する時、冬季期間の農産物調達や農産物加工品の品ぞろえなど、課題が多いと考えさせられた視察であった。

町民建設経済常任委員会 委員長 茂木 勲

浅麓地域活性化議員懇談会

平成27年10月23日 中軽井沢くつかけテラス

なお、福井県は3世代同居が多く、おじいちゃん・おばあちゃんの方で家庭学習の習慣を身に付けさせているとのことである。

また、福井県の教育行政には教科の縦持ち制度があり、たとえば教科担任が中1から中3まで受け持ち、

新たな取り組みに向けて

小諸市・軽井沢町・御代田町の浅麓山麓の議員の集まりである浅麓地域活性化議員懇談会が、27年10月23日に軽井沢町で開催された。懇談会の内容は講演会で、講師は早稲田大学マニユフエスト研究所事務局長の中村健氏で、徳島県川島町で町長を2期務め、初当選時は27歳で全国最年少の首長でもあった。



演題は、「盛り上がる議会報告会はどこが違うのか?」だった。講演会は、一方的に話を聴いている場合が多いが、今回は参加した議員への質問などを交え、また町長就任後の首長側と議会・議員側のやりとりの

実情話をされ、面白く参考になった。

近年、議会改革の一環として、市町村議会・議員が「住民への議会報告会」を開催するようになってきた。議会・議員が直接住民に活動報告をするともに声を聴くことで行政に反映させ、より開かれた行政にすることを目的としている。

研究所のアンケート結果では、自治体の48%が報告会等を開催し、増加傾向にあるとのことであった。

一方で参加者数をみると20人以下の所が多く、人集めを含め、運営の在り方、方法など問題や課題が浮き彫りになってきていることが指摘された。

例として、①決まったことを報告するだけでは話し合いや意見交換にならないこと。②会場で議員と住民の方が相対した形では語り合ったりする雰囲気にならないなど挙げられた。当町でも開催に向けて検



討されたことがあったが、開催を目的とするのではなく、何のためにこのようにするかを主眼に、改めてこの課題に取り組む必要があると感じた。

また、講演後、軽井沢町の議長から現行の県議会議員選挙区の見直しについて提起があり、今後取り組んでいくこととなった。

奥田 敏治

道の駅と音川加工を視察

石川県鹿島郡中能登町 富山県富山市 平成27年11月5～6日

を自指しているが、冬期間は県内外から仕入れた作物を販売しており、その解消が課題であると話されていた。

課題解消のため町とJAは、雪に強い小型ハウス建設に補助金を出し、能登白ネギや金糸瓜・小菊力ボチヤ特に栄養豊かなカララ野菜に力を入れている。

③『優良広報クリニック』では、平成26年度コンクールにおいて優秀紙に選ばれた鳥取県大山町と山形県川

町村議会広報研修会

平成27年10月20～21日 シェーンバッハ・サポール

研修会は①『伝える広報』から『伝える広報へ』

②『思わず手にとって読みたくなる広報へ』③『優良広報クリニック』の内容で開催された。

全国町村議会議長会主催の研修会には、北は北海道から南は沖縄まで多くの議会だより関係者が参加し、800席近くの会場は満席状態の熱気の中、始まった。

①『伝える広報』から『伝える広報へ』では、見やすい文章は得をするという話があり、理由は・読んでもらえる・理解しやすくなる・好感を持たれる

そのためには(短く、ピシユアルに)一文は30字以内で、長くも65字以内で書くのが望ましく、イラストや写真も利用すると読みやすい紙面になると語られた。

この文章は講演内容を肝に銘じながら書いています

が、上手く伝わっているでしょうか。

②『思わず手にとって読みたくなる広報へ』では議会だよりの読みやすい理由として、政治に無関心・「議会」と聞いただけでアレルギー・内容が難しそう・行政用語の羅列・自分に関係ない内容である等のアンケート結果があるが、何のために作るのか・何を伝えたいのか・誰に伝えたいのか良く考え、住民参加も視野に入れ議場を訪ねたくなる魅力的な「議会だより」を目指したらと語られた。

一方、紙面の改善は確かに重要だが最も重要なことは議会本来の目的と議事内容を住民に理解してもらうことが一番大切だと語られた。

③『優良広報クリニック』では、平成26年度コンクールにおいて優秀紙に選ばれた鳥取県大山町と山形県川



西町の議会広報誌を題材として、コンクール審査での5つの指針に沿った紙面評価が発表された。

その中で大山町の議会だより発行目的は「議会への関心を高めること、住民が議事をチェックする材料にすることだと考えます」との話を聞き、御代田議会だよりの良さも良いものにとの思いを強くした。

議会だより編集委員会 委員長 野元 三夫